吉田戦車『伝染るんです。』における心理と言葉

大　場　厚　志

はじめに

吉田戦車『伝染るんです。』の中の心理をネタにしたマンガには、無意識が人に及ぼす影響をいろいろな形で読み取ることができる。そこに見られる無意識の顕在化や精神的束縛には言葉が関連している。作中には言葉をネタにしたものが目につくが、言葉もまた人を束縛するものであることが吉田戦車の鋭敏な言語感覚によって明るみに出されていく。この小論は心理と言葉をネタにしたマンガに焦点を当てて『伝染るんです。』を読む試みである。[1]

一．抑圧された感情

『伝染るんです。』には深層心理学的読みを誘うマンガがかなりある。それらの中には抑圧された感情を暴露するものや、無意識がいかに意識に対して影響を与えているかを表すものがある。まず飛行機を題材にした一連のマンガを見てみよう。

飛行機は安全な乗り物で事故の確率は低いと言われている。したがって乗客たちは、空を飛ぶことに対する恐怖を感じる人たちを除いて、比較的安心して乗っていると思われる。飛行機好きな人はむしろわくわくして搭乗する。ところが、飛行機が無事に着陸したときには、列車等で目的地へ到着したときには感じることのないような安堵感を、誰もが感じるのではないだろうか。飛行機事故の確率は少ないと頭で分かっていても、空中を飛んでいることに対する不安は心のどこかにあるものだと思われる。たとえそのような不安を理性で意識から追い出したとしても、その不安は消えてなくなるわけではない。それは心の片隅あるいは無意識内に存在するのである。『伝染るんです。』の一連の飛行機を題材にしたマンガはそのような不安を見事にかつコミカルに暴き出している。その中の一編は、一コマ目で気流の関係で揺れているという機内アナウンスに続いて、二コマ目で「あ。」という声が同じくスピーカーから聞こえ、三コマ目で間が置かれた後、四コマ目で乗客たちがパニックに陥る（①五八）。[2]三コマ目の間によって、乗客たちの不安が顕在化し、増大していくのが、たった一コマであるにもかかわらず、手に取るように分かる。

夢（悪夢）をモチーフにしたいくつかのマンガは無意識の意識への侵入を表していると読むことができる。次の四編のマンガからそれを検証してみよう。妊娠中の若い奥さんに八百屋の夫婦が「すばしこい子供が生まれるといいね」、「すばしこい子を産んでくださいよ、奥さん」と言うと、彼女は赤ん坊がすばしこく飛び回る夢を見て「イ、イヤ！　すばしこい子なんてイヤよ！」と寝言を言いつつうなされる

②四七)。テレビの花の万博のニュースを聞いておばあさんが「鼻の万博だったら、やですねえ・・・」と言うと、おじいさんは「鼻の万博」の夢【図1】を見て目覚める。幼い娘が父親に「庭には二羽ニワトリがいるのよ」と言った後に「ごわには五羽ゴワトリがいるのよ」と言うと、父親は「ごわ」とおぼしいところに五羽の「ゴワトリ」とおぼしいものがいる夢【図2】を見て目覚める。「庭・二羽・ニワトリ」から「ごわ・五羽・ゴワトリ」への子供らしい想像力による類推と同種のものは、「馬車馬のように働くぞ」と言う父親に対して息子が「ぼくも汽車犬のようにはたらくよ」と応じるマンガにも見られる(②九五)。「汽車犬」という言葉はもちろん存在しない。「汽車犬」と聞いた父親はその時点で当惑を表す汗をかいているものの、それが心理的に影響を及ぼす原因になるとはふつうは考えられない。しかし先に見た三人と同様、この父親も一種の悪夢を見て目覚める。[3] 三コマ目の悪夢に出てくる蒸気機関車に四コマ目の父親が押しつぶされるがごとくに描かれているのが、悪夢の重苦しさを表していて滑稽である。

図1　吉田戦車『伝染るんです。』2巻、学小館、1992、p.38

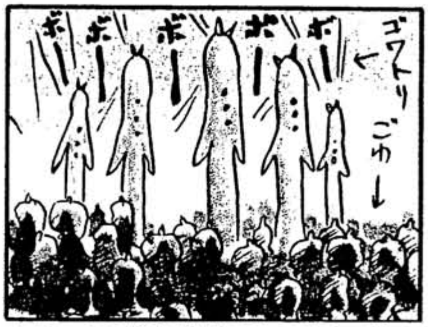

図2　吉田戦車『伝染るんです。』2巻、小学館、1992、p.141

若い奥さん、おじいさん、そして父親二人は、それぞれに当惑した様子を示すものの、取るに足りないはずのものである「すばしこい子」「鼻の万博」「ごわのゴワトリ」「汽車犬」が悪夢となって現れるのが滑稽であり笑いを誘う。意識の上では多少気になっても些細なことと捉えられ、多くの場合忘れ去られることが、心の深い部分あるいは無意識に残っていて夢で回帰するというのは、多くの人が経験することではないだろうか。「すばしこい子」「鼻の万博」「ごわのゴワトリ」「汽車犬」という言葉から夢に現れたイメージはまったく非現実的なものである。「鼻の万博」のイメージはどこかサルヴァドール・ダリの「記憶の固執」のようなシュールリアリズムの絵画を想起させるものがある。だがたとえシュールなイメージではあっても、ダリの絵画の時計にしても「鼻の万博」の鼻にしても、モチーフとなっているものは現実に存在するものである。それは、子、汽車、犬についても同様である。しかし「ごわ」と「ゴワトリ」は言葉として意味不明であり、現実・日常・意識というレヴェルでまったく形になりえないものである。そのようなものが夢の中で形象化されていることは注目に値する。無意識はもちろん意識で捉えることはできないので、無意識内のものは何らかの形に形象化することはできない。形象化不能なものが夢の中で形象化される様子を描いたこのマンガは、まさに無意識内のものの意識への侵入をコミカルに描いたものと解釈することができよう。

二、「影」の投影

【図3】は不可視である心の中の妬みがプラカードに書かれた文字[4]によって目に見える形で表されていて、それがかわうそ君の鬱々とした表情と相俟って滑稽であるが、これは無意識内に抑圧されたものを暗示するマンガでもある。

『伝染るんです。』の読者には自明のことであるが、かわうそ君が妬みを抱いているのは、かっぱ君がハワイに行ったことがあるのに自分は行けないからである。妬みの理由を知っていればこその面白みはたしかにあるだろう。かわうそ君とかっぱ君は友人関係にあるが、友人だからこそライバル心が強く働く。見知らぬ人がハワイへ行ってもさほど妬むこともなかろうが、ハワイへ行ったのが友人のかっぱ君だからこそ妬みは深くなっていく。かっぱ君がハワイへ行ったことをかわうそ君に話さなかったことが彼の怒りと妬みを増幅する。その鬱々とした表情に加えて、自分を迂回する少年の後をついて行くところにかわうそ君の妬みの深さがうかがわれるのであり、彼の妬みが様々な形で描かれる数編のうちの一編として、読者は彼の妬みを笑うことになるのである。

図3　吉田戦車『伝染るんです。』2巻、小学館、1992、p.5

だがかわうそ君の妬みの理由にかかわりなく、この一編は人間の心理について語りかけてくる。目の前に妬みの気持ちをそのまま表情にむき出しにした人がいるとしよう。誰しも少年と同じように嫌なものを感じ、できれば近づきたくないと思うだろう。むき出しの感情に出会うと、それを避けたいと思うのは自然のことだ。しかし、妬みにせよ羨望や劣等感などその他の負の感情と言うべきものにせよ、程度の差はあれ誰しも抱いたことのあるものだろうし、それらを抱いたとしても、できることならそれを認めたくないであろう。これらの感情は抱くと苦しみを伴うことも多いので、人はときにそれらを抑圧する。平安な日常のためにこれらは忌避される。ところが意識に上らないときにも、これらの感情は抑圧された形で存在し、何かのきっかけで意識に侵入する。そのような観点からこの一編を見るとじつに興味深い。少年が妬みの権化のようなかわうそ君を見て何か嫌なものを感じるのは、むき出しの感情に対する自然の反応であるだけでなく、程度の差はあれ彼の中にもかわうそ君と同様の妬みがあるからでもあると解釈することができるのである。ユング心理学を援用すれば、かわうそ君は少年の無意識に存在する「影」の投影像であると見なすことができよう。迂回する彼の後をかわうそ君がついてくるのは、いかに抑圧しようとも、彼がそのような感情から逃れることができないことを表していると解しうるのである。我々読者も同様であることは言うまでもない。

三、精神的な父親殺し

吉田戦車『伝染るんです。』における心理と言葉

［図４］の父親と息子の関係を扱ったマンガも深層心理学的な観点から興味深い。大人になったら刑事になるというのは、男子であれば、パイロット、野球やサッカー等のスポーツ選手など、女子であれば、看護師、保育士など、将来に対する子供の夢を語ったものであるが、刑事になる目的が、この世の悪を許さないという子供らしい正義感の充足ではなく、自分の父親を逮捕することであるのが、通常我々が考える子供の将来の夢の範囲を逸脱していて面白いし、息子の「夢」が二〇年後に実現するところも笑いを誘う。彼の将来の「夢」が実現することは、逸脱が逸脱でなくなることであり、非常識が常識に寝返るということである。『伝染るんです。』ではよく見られるように、このように常識と非常識の境界が曖昧化する点でこのマンガは我々の常識・日常に揺さぶりをかけている。

またこのマンガは子供の成長をユーモラスに描いたものと読むことができる。子供は親に守られ親に依存して成長していくが、いずれは自立しなければならない。その過程で親を、男子の場合は父親を、精神的に乗り越えていく。このマンガはそのような成長を息子による父親の逮捕という形で表現していると解釈できる。三コマ目の平手打ちは父親の怒りを表すと同時に、父親と息子の力関係も表している。逮捕は行動の自由を奪うことであるので、それによって父親と息子の力関係の逆転が強調される。

図４　吉田戦車『伝染るんです。』2巻、小学館、1992、p.131

成長という観点からさらに言えば、このマンガはエディプス・コンプレックスを描いたものでもある。エディプス・コンプレックスは異性の親に対する抑圧された性的願望と、同性の親に対する憎悪、親殺しの願望である。このマンガは同性の親＝父親に対する願望を表している。「父さんはいつか絶対悪いことをする」と息子は思うが、「絶対」という言葉から読み取ることのできる父親の悪に対する息子の信念は、父親に対する無意識的な憎悪によるものである。憎悪するには父が悪であるほうが都合がいいのである。その背後に異性の親すなわち母親への無意識的な性的願望を読み取ることもできるだろう。そして父親の逮捕は父親に優越したいという願望の成就であるとともに、精神的な親殺しのメタファーと捉えることができる。

エディプス・コンプレックスのコンテクストでさらに考えると、息子の言葉は父権社会のタブーを犯すこと、父親の平手打ちはタブーを犯したことに対する息子への処罰、そしてこの処罰は「父性原理の象徴[5]」である去勢と同質のものと捉えることができる。息子の去勢不安が示唆されることなく、一気に二〇年後の精神的な親殺し、それに伴う父と息子の力関係の逆転、そして息子の自立を示唆する、息子による父親の逮捕が描かれるところがコミカルである。

四．心理・言葉・束縛

これまで見てきたように、深層心理学的アプローチを誘う一連のマンガは無意識の顕在化や精神的束縛と関連するものである。そしてそれらのマンガは言葉と無関係ではない。「すばしこい子」「鼻の万博」「ごわのゴワトリ」「汽車犬」という悪夢の原因がもとは言

葉であることは、言葉が無意識的に人を呪縛するということを示す。かわうそ君の妬みは文字という目に見える言葉で表されたが、その妬みが少年につきまとって離れないことも言葉と無意識的な束縛との関連を暗示している。刑事になり父親を逮捕するマンガには言葉は無関係のように見えるが、息子の成長過程において三コマ目までが反復されるとしたら、すなわち息子が父親に「父さんはいつか絶対悪いことをする」と言い続けるとしたらどうだろう。『伝染るんです。』には、スリ夫という名の息子が、スリにだけはならないでくれと親に言われたのに、おそらくスリ夫と呼ばれ続けたせいでスリになり逮捕されるマンガもあるのである（⑤一四）。

『伝染るんです。』には言葉をネタにしたマンガが多いことはよく知られている。同音異義語やそれに類するものをネタにしたものが目につくが、人間の心理や無意識と関連するものも少なからずある。そして言葉は人間を束縛するものであることもそれらのマンガから読みとることができる。

先生とか社長さんとか呼ばれる芸術家風の人物が登場する一連のマンガを見てみよう。この人物は、とりかえしのつかないことをするという意図的にするはずのないことを意図的にする［図5］。とりかえしのつかないことをするのに、納豆を練ってしっかり準備するところや、意図的にしたのに「ガーン」と衝撃を受けるところはきわめて滑稽である。とりかえしのつかないことを意図的にするというのはもちろん非常識であるが、非常識であるからこそ、したがってそのような行為を理性が禁止するからこそ、やってしまうという天邪鬼の心理は、程度の差こそあれ誰しも抱いているものであろう。この人物は他にも地団太を踏む、弱音を吐く、見て見ぬふりをする、という行為も意図的に行う［図6、7、8］。そのありえなさが笑いを誘うのであるが、よく考えてみれば、それらの行為はじつは意図的にしようと思えばできるものである。[6] そのことに気づいたとき、常識に揺さぶりをかけられたような感じを抱くことになるだろう。たしかにこれらは常識を侵食するマンガである。

衝撃を受ける、悔しがる、挫折感を味わう、罪悪感を味わう——これらのような苦痛を伴うことを自らすすんで体験しようとするところに、この人物のマゾヒスティックな心理を読み取ることも可能だろう。そのような倒錯心理ゆえのものであるとしても、彼の行為はわざわざ劇場まで足を運んで悲劇を見て涙を流したり恐怖したりして心の中を浄化するのと通底するところがあり、その意味で彼が体験しようとするものは一種のカタルシ

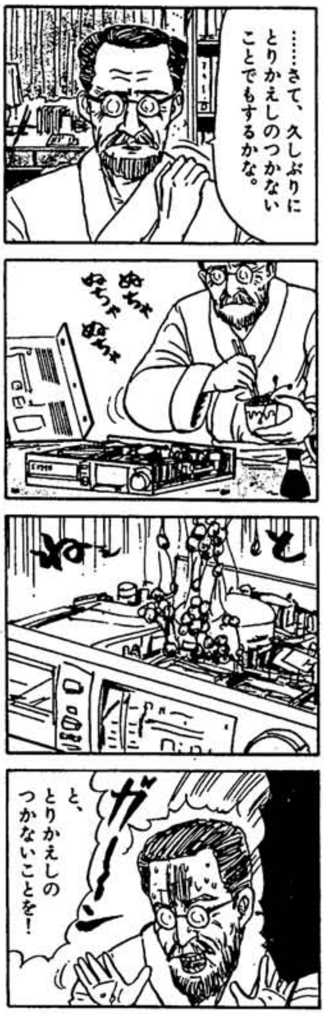

図5　吉田戦車『伝染るんです。』1巻、小学館、1990、p.51

図6　吉田戦車『伝染るんです。』2巻、小学館、1992、p.23

図7　吉田戦車『伝染るんです。』1巻、小学館、1990、p.95

図8　吉田戦車『伝染るんです。』1巻、小学館、1990、p.84

スに通じるものでもある。彼の行為は負の感情の浄化なのだと言える。またその行為によって刺激を求めるという点では、アンニュイな日常からの解放への願望をはらんだものと捉えることもできよう。

さて、これらの行為を意図的にすることができるといっても、もちろんそれは行為の形の模倣でしかない。とりかえしのつかないことをしたときの衝撃、地団太に込められた怒り・悔しさ・無念さ、弱音を吐くときの挫折感、見て見ぬふりをするときの罪悪感などに匹敵するほどのものはそこにはない。しかし彼はそのような行為を意図的にすることに執着する。ここで注意しておきたいのは、それらの行為を表す言葉がなかったら果たして彼はそのような行為に執着しただろうかということである。行為への執着以前に言葉への執着があると考えられるのである。

とりかえしのつかないことをするマンガと類似したマンガに、意図的にウカウカしようとする人物を描いたものがある（④一三七）。これは彼がウカウカしているうちに子供たちの目の前で妻がよその男と家を出て行くという内容である。永井均氏が指摘するように、意図的にとりかえしのつかないことをすることはできるが、意図的にウカウカすることはできない[7]。先の人物と同様、彼もまた言葉にとらわれていると言えよう。

現代に生きる人間は時間に縛られざるをえない。そのため意識的・無意識的に人は時間の束縛から解放されたいと願う。『伝染るんです。』の中には時間の束縛からの解放を願う心理を描きつつ、時間感覚もまた言葉と関連するものだと気づかせてくれるものがある。ビデオを買った若者が「『昼のプレゼント』を夜に観れるな」と嬉し涙を流すマンガにおいて、彼はリアルタイムではない時間帯にテレビ番組を見ることに無上の喜びを感じる（①八六）。これは時間の束縛からの解放を喜んでいると言える。薄暗い部屋で彼が「くくっ」と忍び笑いをしながら夜一人で『昼のプレゼント』を見る四コマ目［図9］には、人知れず規則を破ったり禁忌を犯したりするときに感じるような甘美で背徳的で密かな喜びのごときものを読みとることができよう。それは彼の時間への拘泥の証左となるとともに、時間による束縛状況が現代社会においては不可避だという前提が示唆されているように思われる。彼の喜びが背徳的に見

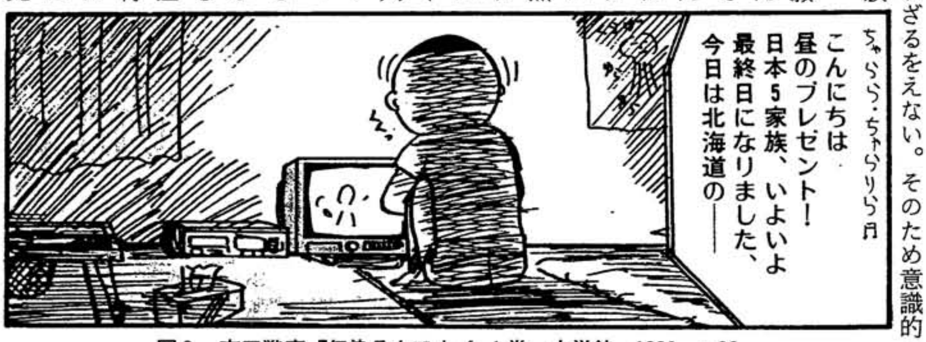

図9　吉田戦車『伝染るんです。』1巻、小学館、1990、p.86

え、またそれが密かなものであるのは、社会の前提を破っているからなのである。ところがビデオを見るために彼の肉体は薄暗い部屋に束縛される。これは彼の喜びが背徳的であり密かであることとパラレルになっている。皮肉なことに、時間からの解放は肉体の束縛に支えられているのである。

じつは束縛されるのは肉体にとどまらない。［図10］はその続編の三コマ目である。「きのう録った『きょうの料理』をあした観ることもできるのだ！」と彼は興奮し喜ぶ。昼の番組を夜に見るという一日の中でのことのみならず、「きのう」の番組を日を跨いでその二日後である「あした」見られることが、時間からの解放感をさらに強める。ところが彼の「昼」「夜」「きのう」「きょう」「あした」という時間への拘泥は、時間帯や日を表す言葉にとらわれていることにほかならない。時間の概念も言葉によって表されるものなのだ。したがって、彼が感じる時間からの解放は、じつは言葉による束縛なのである。

図10　吉田戦車『伝染るんです。』1巻、小学館、1990、p.97

本物志向の心理を皮肉ったマンガも言葉の束縛と関連する。現在では電車やバスの吊り革は人工皮革とプラスティックで作られているのが普通だろうが、吉田戦車は革を皮に変換して、本物の皮（おそらく生皮）を「吊り皮」として登場させる（⑤一五）。一般的には代用品としての人工物より本物、すなわちコピーよりオリジナルの方が価値があると思うだろうが、触れると気持ちの悪い本物の生皮を描いたところには本物志向に対する皮肉が感じられる。(8)「ひな人間」が登場するマンガも本物志向を皮肉っている［図11］。人形は人間を模ったもので一種のコピーである。父親が娘にひな人形の代わりに「ひな人間」を買ってきたのは、「ひな人形じゃつまらんだろうと思って」という言葉から明らかなように、コピーよりもオリジナル＝本物の方が値打ちがあると考えたからである。しかし人間は人形と違い黙してじっと座っているわけではないし、食事もすれば排泄もする。「ひな人間」が遊んだり食べたり排泄したりする様子を嫌そうな顔で眺めていた娘が「お父さん、私あんなのやだ！」と言うのに対して、

図11　吉田戦車『伝染るんです。』5巻、小学館、1994、p.7

父親が「人間なのにか?」と答えるところに、本物志向への皮肉を感じざるをえない。それ以上に問題なのは、人間＝オリジナル、人形＝コピーという言葉の意味内容に父親が誘導されていることである。父親は内容・実体そのものよりも言葉に縛られていると解釈することができる。「ひな人間」が「人〜間〜。」「に〜ん〜げ〜ん〜。」と繰り返すところも言葉の縛束という解釈を補強してくれるだろう。同様に「吊り皮」のマンガもまた言語の桎梏・呪縛を意識させるものであるのだ。

おわりに

『伝染るんです。』では人間が無意識にいかに影響を受けているかを、抑圧、「影」の投影、エディプス・コンプレックスと精神的な親殺しのような形で読み取ることができる。無意識の影響は言葉と無関係に見えるかもしれないが、それは何らかの形で言葉とかかわっているように思われる。作中では繰り返し言葉による心理的束縛が滑稽に描かれているのである。我々はマンガを読んで笑いつつも、人間は無自覚的に言葉によって束縛されていると知らされることになる。吉田戦車のマンガは不条理ギャグマンガと言われ、それに対する反論はあるものの、この評価はほぼ定着している感がある。もともとこの不条理というレッテルは、現実・日常・常識から逸脱し不可解で無意味に見える『伝染るんです。』の内容に対して貼られたものなのだが、言葉によって心理的に束縛されている人間の存在のありように対しても貼ることができるだろう。新宮一成氏は精神分析と『ドラゴンボール』の関連について説明した後、マンガ家と詩人との共通性について、「フロイトは、詩人が精神分析の苦労の末の発見をいともやすやすと作品の中で実現することに驚きを隠していないが、漫画家は現代の詩人の一人なのであろう[9]」と述べている。『伝染るんです。』を読めば、吉田戦車もまた詩人のごとき存在であるという見方に異を唱える人はあまり多くはないのではあるまいか。『伝染るんです。』はそう感じさせるマンガなのである。

注

1　二〇〇九年八月から一〇月にかけてDVD版アニメーション『伝染るんです。』全三巻（監督:まんきゅう、販売元:東宝）が発売された。四コママンガのアニメ化は、たとえばいしいひさいちのマンガのアニメ化もありことさら珍しいという印象は与えないものの、人気コメディアンのカンニング竹山がカブトムシ斉藤の吹き替えをするなど話題性もある内容である。同年一〇月からは実写版が携帯電話へ動画配信されている。雑誌連載から二〇年を経てなおこのような人気を保っていることは、この作品の人気が単なる一過性のものではないことの証左となるだろう。実際、ずいぶん昔の作品として『伝染るんです。』に懐かしさを感じる人が多い反面、この作品が与えるインパクトは現在でもあまり減じていないように思われる。カンニング竹山はDVDの映像特典のインタヴューで、このマンガの笑いについて、普段使わない筋肉を使うような感じという旨の発言をしているが、それは一つにはこのマンガが不条理なものや非常識なものを提示することで我々の現実・日常・常識に揺さぶりをかけてくることに由来すると思われる。

2　テクストは吉田戦車『伝染るんです。』全五巻、小学館、一九九〇−九四を使用する。『伝染るんです。』からの引用は、（①五八）のように巻数と頁数を括弧に入れて本文中に示す。なお、飛行機を題材にしたマンガはこの他に、①五六、①六〇、②一二、②二一である。

3　この「汽車犬」のマンガについては、大場厚志「吉田戦車『伝染

るんです。』における記号と束縛」日本マンガ学会『マンガ研究』一六号（二〇一〇）八七－九六頁において、大人／子供、経験／無垢という観点から分析した。

4 登場するキャラクターの名前については、南信長選・評「吉田戦車キャラクター図鑑」『文藝別冊　総特集　吉田戦車』河出書房新社、二〇〇九、一〇二－一二五頁を参考にしたが、若干変更したところもある。

5 小此木啓吾『フロイト思想のキーワード』講談社現代新書、二〇〇二、二三四頁。

6 たとえば目の前に高価な焼き物があったとして、それを意図的に割るようなことは常識では考えられないが、実際それを意図的に割ることは可能なのである。焼き物を割ることは"probable"ではないが"possible"なのである。

7 永井均『マンガは哲学する』講談社、二〇〇〇、二八頁。

8 この「吊り皮」のマンガについては、言葉との戯れというコンテクストにおいて「吉田戦車『伝染るんです。』における記号と束縛」でも言及した。

9 新宮一成『ラカンの精神分析』講談社現代新書、一九九五、一一一頁。

（本学人文学部教授）